

特集

3 全面実施への助走 第2回

何のため？ 各教科での言語活動

4 課題整理

どこが難しい？ 各教科での言語活動

——読者アンケート結果より



6 理論編

目的を明確にした言語活動で思考力、判断力、表現力を育む

文教大教育学部 鳴島 甫 教授

越谷市教育委員会 教育総務部指導課 教育センター 教育研究担当 小林俊夫 主査

10 実践編 1

国語と各教科の役割を意識し 考えを深める手立てを充実

埼玉県 越谷市立蒲生^{がもう}小学校



15 実践編 2

「各教科等で育てたい国語力」と 「学びの技」により力を育む

秋田県 横手市立十文字第一小学校



20 実践編 3

「話し合い方シート」を用いて 少人数での交流を活発化

香川県 綾川町立滝宮^{たきのみや}小学校



連載

1 私を育てたあの時代、あの出会い

「教育はロマン」夢を語る大切さを教えてくれた恩師の言葉

鹿児島県 鹿児島市立田上小学校 校長◎和田幸一郎

26 Let's go! 外国語活動

「分からないからやってみる」研究で1年間で全学年の担任がT1に

神奈川県 座間市立入谷小学校

28 つながる学校と家庭の学び

思いやりの心と知的好奇心を育む「弁当の日」

岐阜県 美濃加茂市立蜂屋小学校

32 読者のページ Reader's VIEW / 編集後記

*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます

*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます

私を育てた
あの時代、あの出会い

Vol.2

「教育はロマン」夢を語る大切さを 教えてくれた恩師の言葉

鹿児島県 鹿児島市立田上小学校校長 **和田幸一郎** WADA KOICHIRO

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で子どもを育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、和田校長が語る。

朝の短い会話でも子どもと
向き合う力になった

教師になって5年、旧隼人町立宮内小学校に赴任した頃の私は、授業はもちろんのこと、創作劇や新聞作り、親子キャンプなど、さまざまなことに体ごとぶつかり、挑戦しました。ある時、そんな私の姿を子どもたちがどう見ているのかと思い、私の通知表を作ってもらうことにしました。その中に「生徒を公平にあつかっているか」という項目があり、その評価が「C（努力しましょう）」だったのです。私はどの子にも同じ

気持ちで接しているつもりでしたが、ところが、子どもたちにとってはそうではなかったのです。大変ショックでした。それを機に、私は一人ひとりの子どもを大事にすることをますます意識するようになりました。悩みもたくさんありました。子どもへの接し方、学級経営、授業の仕方、保護者への対応……。その時によく相談したのが、当時教頭の長崎浩司先生でした。私は毎朝、誰よりも早く学校に行き、悩みや分からないことを長崎先生に尋ねました。長崎先生は私の質問に対して、いつも柔和な笑顔で、実地的確に、具体的



わだ・こういちろう 1973年、新採として佐多町立大中尾小学校に着任。旧隼人町立宮内小学校、与論町立茶花小学校、県教育委員会義務教育課指導監などを経て、2008年、鹿児島市立田上小学校に着任。現在に至る。

1973 (昭和48)
新採として旧佐多町立
大中尾小学校に赴任

1978 (昭和53)
旧隼人町立
宮内小学校に赴任、
長崎浩司教頭と出会う



卒業アルバムで
長崎教頭(左)と並んで

1989 (平成元)
旧枕崎市立
金山小学校に
教頭として赴任

1998 (平成10)
与論町立
茶花小学校に
校長として赴任

2006 (平成18)
県教育委員会に
指導監として赴任

2008 (平成20)
鹿児島市立
田上小学校に
校長として赴任

特集

全面实施への助走 第2回

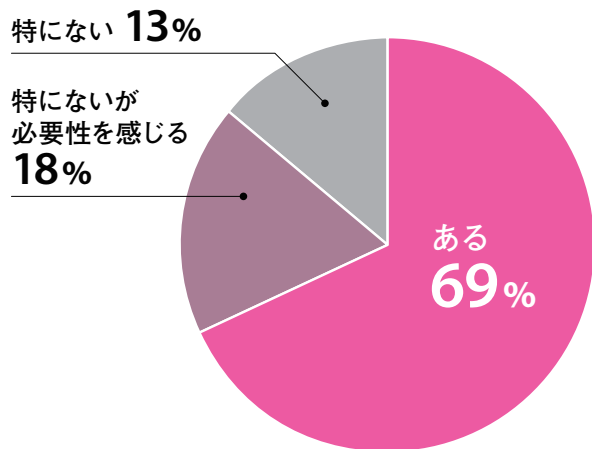
何のため?

各教科での言語活動

新学習指導要領のポイントである「言語活動の充実」。

国語だけでなく、各教科等にも取り入れる意義と日々の授業づくりの考え方を理論と実践から確認する。

Q 言語活動の充実のために、
国語以外の教科や教科外活動において
取り組んでいることはありますか



※2009年9月、全国の『VIEW21』小学版読者モニター（小学校教師）へアンケート用紙を郵送し、ファクスとインターネットで回収。有効回答数は112

—— 読者アンケート結果より 「何が難しい？」各教科での言語活動

小誌が行った読者アンケートからは、多くの学校が、国語以外の教科や教科外で、言語活動の充実を図っていることがうかがえる。しかし、言語活動の目的が不明なまま実践されているのが現状のようだ。

課題

指導の現状

言語活動の意義が浸透しきれていないようだ

教師個々のイメージがバラバラのまま、言語活動に取り組んでいる

言語活動で何の力を付けるのか、校内で共有できていない

言語活動をしても、力が付いたかどうかの評価があいまいなまま進んでいる

背景にある課題

言語活動はされているが、「何のために」が抜けてしまっている

- 言語活動でどんな力を付けさせたいか、という目的が明確になっていない
- 言語活動の背景にある理論に目を向けないまま、具体的な方法を求めてしまっている

何のため？ 各教科での言語活動

解決のヒント

理論編

言語活動の目的は 思考力、判断力、表現力等の育成

文教大 鳴島 甫 教授 ● 越谷市教育委員会 小林俊夫 主査

P.6

- 言語活動により、意見を交わしながら、自分で考えを深められる子どもが育つ
- 言語活動には、思考力、判断力、表現力等を育てる具体的な要素が必要

実践編

子どもが考えを深める力を付けるために 言語活動に取り組む

埼玉県越谷市立 ^{がもう} 蒲生小学校

P.10

- 各教科・領域での言語活動を明確化。各学年の年間指導計画に加筆
- 力を育むための手立てを充実。考え方、話し方を示したり、表現力や語彙力を高めるための「ことのはノート」を運用したりする

秋田県横手市立 十文字第一小学校

P.15

- 育成すべき力を、「各教科等で育てたい国語力」として明確化
- 「国語力」を育む手段として、各教科の言語活動を併せて一覧に
- 全教科に応用できる考え方などのコツなどを、「学びの技」として活用

香川県綾川町立 ^{たきのみや} 滝宮小学校

P.20

- 子ども同士の「交流」活動を重視
- 「交流」が活発化するよう、グループ活動、ペア活動を取り入れる
- 話し合いの方法を示す「話し合い方シート」を活用

目的を明確にした言語活動で 思考力、判断力、表現力を育む

各教科等での言語活動は既に取り組みられている一方で、その目的についてはあいまいなままであるという実態がありそつだ。改めて、各教科等で言語活動を充実させる意義や授業づくりについて、文教大の鳴島甫教授と、文教大と共同研究を進めている埼玉県越谷市教育委員会的小林俊夫主査にポイントをうかがった。

各教科等における「言語活動の充実」の目的

- 言語活動の目的は、思考力、判断力、表現力等の育成。各教科等を充実させ、ねらいを達成するためのもの

「言語活動」の意義

- 一人ひとりが自分で考え、間違いを恐れずに意見を交わし、共に学び合える子どもが育つ
- 自分の経験や知識を基に考える子どもが育つ

授業づくりの考え方

- 各教科等のねらい、特性に即して言語活動を考える
- 思考力、判断力、表現力等を育てる言語活動を取り入れる

文教大教育学部

鳴島 甫 教授

なるしま・はじめ◎筑波大名誉教授。筑波大附属高等学校などを経て現職。専攻は国語表現学、国語教育学。著書に「俳句によるレトリック、原点からの指導」（大修館書店）、共著に「高等学校新学習指導要領の展開 国語科編」（明治図書出版）など。



越谷市教育委員会 教育総務部指導課
教育センター 教育研究担当

小林俊夫 主査

こばやし・としお◎埼玉県草加市立花栗中学校や同市立新栄中学校教諭、越谷市教育委員会教育総務部学校課教職員係主任指導主事、指導課教育研究担当主任指導主事などを経て現職。市内の多くの小・中学校を回り、授業力の向上に取り組む。

何のため？ 各教科での言語活動

各教科等における「言語活動の充実」の目的

すべての教科で求められる
思考力、判断力、表現力の育成

鳴島 各教科等で「言語活動の充実」がなぜ求められるのかを確認しておきましょう。

言語活動が重視されるに至った背景の一つが、2004年に文化審議会が出した「これからの時代に求められる国語力について」という答申です。この審議会には国語関係者だけでなく、数学者や脳科学者なども参加し、「国語力」は国語を中心としながら、各教科やその他の教育活動全体の中で身に付けるものであることが示されました。また、「読解力」(*1)に課題があるというPISA調査の結果を受けて、文部科学省でも、各教科や「総合的な学習の時間」など、学校の教育活動全体で読解力向上に取り組む方針を打ち出しています。

新学習指導要領の『総則』では、「思考力、判断力、表現力、その他の能力」「主体的に学習に取り組む態度」などを育むことが強調されています。その思考力、判断力、表現力等を育む観点から、各教科等の指導で言語活動の充実が求められているのです(図1)。「言語活動」とは、「話す」「聞く」など、「言語による活動」と捉えておくと良いでしょう。

この活動が、思考力、判断力、表現力等育成のための手段であり、そのためにすべての教科等で取り組むことが重視されているのです。新学習指導要領では国語を中心として言語活動を進めることが示されていますが、これは国語の「補填」という意味ではありません。あくまでも全教育活動を通じた言語活動の充実が求められています。

小林 国語以外の教科の言語活動がイメージしにくいのは、言語活動のテーマは「言葉だけ」と考えがちなことがあると思います。しかし実際には、音声や絵画、身体表現など、各教科の特性に合わせて言葉を使うシーンがあることを思い起こせば、他教科にも取り入れやすくなるのではないのでしょうか。

例えば、グループごとにリコーダーの曲をつくる音楽の授業で、一人が一小節ずつ考えてつなげていく活動を組めば、伝え合う力を育むと共に、音楽に創造的にかかわる力にもつながります。体育では、例えばハードルを跳び越えられない子どものために、クラスの子がアドバイスしたり、応援をすることも言語

活動です。言語活動とは、各教科等を充実させるためのもの、各教科等のねらいを達成するためのものであり、それぞれの特性を考えて取り入れることが大切なのです。

「言語活動」の意義

間違いを恐れずに
意見を交わし合える子どもが育つ

鳴島 言語活動を充実させることで育つ子どもの姿を具体的に考えてみましょう。今後の社会では、一人ひとりが自分で考え、「僕はこう考えた」などと、間違いを恐れずに意見を交わし、共に学び合える子どもの育成が求

図1 新学習指導要領 第1章 総則

第1 教育課程編成の一般方針・1からの抜粋

学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、児童に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。その際、児童の発達の段階を考慮して、児童の言語活動を充実するとともに、家庭との連携を図りながら、児童の学習習慣が確立するよう配慮しなければならない。

第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項・2(1)からの抜粋

各教科等の指導に当たっては、児童の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童の言語活動を充実すること。

*下線部分は編集部加筆

*1 自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力(文部科学省「読解力向上プログラム」2005年12月より)

められています。しかし、これまでは、まだ先生方が「正解」を教える授業が多かったのではないのでしょうか。そういう授業を見直して、子どもが正解をつくり出していく学習にすることが求められていると思います。

小林 確かに、これまで「教室は間違えても良い場だ」と言いながら、子どもが間違いを恐れずに自分を表現するための場にはなっていませんでした。子どもが主体的に考え、表現をしていく場となる言語活動は、有効な手段となると思います。

鳴島 これからは、自分の知識や経験と結び付け、新たな問題を解決していく力も必要です。自らの経験は、すべて言葉を通じて認識されるものです。だからこそ、体験と言語を結び付けた言語活動が重要だと思います。

例を挙げましょう。国語の「音を表すことば」（擬音語）を学ぶ授業で、教科書を読むだけなら、「こんな言葉があるんだな」という理解だけで終わります。しかし、例えば、身の回りから音を表す言葉を探して発表し合うという言語活動を取り入れれば、「消防車のサイレンの音がそうだ」などと、学習と知識や経験が結び付きます。これにより思考が深まると共に、新しいことを学ぶ時に「自分の知識や経験を基に考えれば良い」と自信を持って考えられるようになっていくのです。活動の形にすることで、子どもが本気になって取り組み、力が付くという利点もあります。

図2 「言語活動の充実」のためのチェックシート



*文教大と越谷市教育委員会の共同研究資料を基に、編集部が作成

言語活動を取り入れる
授業づくりの考え方

思考力、判断力、表現力が
十分に育つ要素が含まれるか

小林 現在、文教大と越谷市教育委員会の共同研究（*2）により、言語活動の充実に向けた取り組みを進めています。最初は言語活動と聞いて、「新しい指導を取り入れなければ

ならない」と構える先生方がいましたが、これは誤解です。どの先生も、言語を用いて伝え合う、表現するなどの言語活動を、多かれ少なかれ授業に取り入れているのです。ただし、これまでは、すべての授業で何のための活動なのかを意識されていたとは言い難いと思います。ですから、今、先生方にお願したいのは、各教科等のねらいや特性に応じて、言語活動のねらいや内容を改めて確認し、意識的に取り入れていくことです。

*2 研究テーマは、「『言語活動の充実』に関する教員研修 カリキュラムの開発・実施を通じた研修リーダーの育成」。理論と実践をつなぎ、教員の資質を高めるというねらいの下、08年度から行っている

何のため？ 各教科での言語活動

効果的な言語活動とするための ヒ・ソ・ト

ポイント① メリハリを大切に

算数などでは言語活動を取り入れようとするあまりに、基礎的・基本的な知識・技能の習得に重点を置く時間が足りなくなるケースもあるようです。毎回の授業に必ず言語活動を取り入れる必要はありません。時期によっては計算の練習に集中するなどして、授業にメリハリを付けると良いでしょう。(鳴島先生)

ポイント② モデルを提示する

話し合いや発表などの活動では、いかに子どもが意見を述べ合い、深め合うかがポイントになります。例えば、ある子どもの意見に賛成の時、「同じように考えたけど、この部分だけ違います」「意見を聞いて、新たにこんなことにも気づきました」などと、自分の言葉を補って話すことが学び合いになります。これには訓練が必要です。まずは教師が発表や賛成・反対の仕方を見せたり、出来そうな子どもがまず答えるようにしたりして、話し方のモデルを示せば、それをまねすることから始められるでしょう。(小林先生)

ポイント③ 実態を踏まえて活動の形態やテーマを考える

小学生の場合、いきなり4人グループの話し合いをさせても、なかなか意見がまとまりません。まずはペア活動から始めるなどして対話に慣れさせた上で、人数を増やしていくと良いでしょう。(小林先生)

答えが一つの問題をグループで考えさせるような言語活動は、塾で習った子どもがリードするなどして、全体での話し合いが深まらないことがよくあります。多様な考え方が出来るテーマを選ぶことが大切です。また、子どもが自分の考えを書いたワークシートなどをグループ内で読み合い、他の子どもが感想や意見などを書いていくのも意見交換が深まりやすい活動の一つです。(鳴島先生)

鳴島 言語活動を授業に取り入れる上で必ず考えてほしいのは、思考力、判断力、表現力が育つ活動になっているか、ということ。言語活動は目的を達成するための手段であり、その目的とは、授業のねらい、その教科

での思考力、判断力、表現力の育成なのです。

小林 よくあるのが、グループの話し合いを取り入れさえすれば言語活動になると考えて、話し合いをする目的を考えていないケースです。話し合いには、「一人ひとりの考えを広げる」「グループの意見としてまとめる」など、さまざまな方向性があります。付けたい力に照らし合わせて、そもそも話し合いが必要かどうかを考え、取り入れる場合には適

切な材料や話し合いの流れを提示するなど、目的の達成に向けた教師の導きが不可欠です。

鳴島 それと似たケースに、「インターネット」で調べたことを発表する」「スピーチの仕方を学ぶ」といった活動があります。これらは言語活動の前段階としては良いかもしれませんが、これだけで、すぐに言語活動となるわけではありません。

小林 力の育成につながる言語活動を取り入れた授業をつくるために、文教大との共同研究では鳴島先生の提唱の下、全教科の言語活動に共通して必要な要素を整理しました(図2)。まず、全教科で考えられる言語活動を洗い出し、「A 主な学習活動」として分類し

ました。その中で、「B 思考、判断等の主な活動」の要素が含まれることが見えてきたのです。更に、言語活動自体の目的も必要で、それが「C 明確な活動の目的」となります。このチェックシートは、指導案の作成時や作成後にこれらの要素が入っているかを確認するという使い方が出来ます。授業づくりの参考にしてみたらどうかと、教師の大量退職を間近に控え、若い先生方への知の伝承を目的として作成しました。

鳴島 A、Bはそれぞれ、すべての要素を盛り込む必要はありません。それぞれの要素の一つか二つに絞った言語活動は、むしろねらいが明確であり、子どもが集中して取り組みやすくなると思います。

鳴島先生

小林先生

から

先生方へのメッセージ

自分の力で考える子どもを育てるには、先生方自身が考えることが何より大切です。一人ひとりの先生が、子どもに付けたい力とそのために必要な授業を十分に考えてください。言語活動には「こうすれば良い」というマニュアルはなく、最終的には子どもの実態に合わせる事が大切です。十分に考えさせる前に答えを与えていないかなど、目の前の子どもをしっかり見つめながら、言語活動の充実に取り組んでいただきたいと思います。

国語と各教科の役割を意識し 考えを深める手立てを充実

埼玉県 越谷市立蒲生^{がも}小学校

越谷市立蒲生小学校では、子どもが意見を出し合いながら、自分の考えを深めていくために各教科・領域で言語活動の取り組みを一覧にした。国語を中心に教師の手立てを大切にしながら研究を進めている。

課題

- 他者と意見を交わし、自分の考えを深めていくのが苦手な子どもが多い
- 校内研究では書くことに力を入れてきたが、表現力や語彙力はなかなか高まらなかった

研究のねらい

- 国語を中心として、各教科・領域で言語活動を改めて意識
- 言語活動が考えを深める場となるよう、手立てを考える

実践

- 各教科・領域での言語活動を明確化。全学年の年間指導計画に、言語活動例を赤字で加筆
- 考え方、話し方を示したり、語彙を増やすための「ことのはノート」を運用したりする

成果

- 話し合いなどの中で、友だちと意見の折り合いをつけながら、自分の考えを深められるようになった
- 教師は身に付けさせたい力と、そのための手立てを強く意識。それにより、子どもも学んだことを自覚できる授業になった

S c h o o l D a t a

◎1873(明治6)年開校。2003年度から2年間、越谷市教育委員会から「学習指導」(国語)の研究委嘱を受け、以来、一貫して国語を研究。05年度から毎年1回、自主研究発表会を開いている。



校長 山下 浩先生

児童数 362人 学級数 12学級(他通級指導学級2)

所在地 〒343-0842 埼玉県越谷市蒲生旭町1-84

TEL 048-985-6612

URL <http://school.city.koshigaya.saitama.jp/gamou-e/>

公開研究会 2010年度は校舎工事のため非公開

何のため？ 各教科での言語活動

◎課題と研究のねらい

言語活動を通じて 子どもの考えを深めさせたい

埼玉県南東部に位置する蒲生小学校。東京都内まで電車で30分程度だが、子どもは都会的というより純朴な気質が強い。素直である半面、自分の考えを発信したり、自ら行動したりする積極性に欠けるのが課題だった。

こうした実態を踏まえ、同校は2003年度から国語を軸にした校内研究を続けている。08年度までの6年間は、主に「書くこと」を中心に表現力の向上に力を入れてきた。その結果、子どもは抵抗感なく文章が書けるようになってきた。例えば、高学年では、水泳の授業についての20行程度の感想文を10分もかけずに書くという。

ところが、他者と意見を交わしたり、自分の考えを深めたりすることは苦手としていたと、山下浩校長は話す。

「自分の考えを自分の言葉で説明することは、これまでの授業でも行ってきました。しかし発表するだけで、出された意見を踏まえ、更に考えさせる指導は十分とは言えませんでした。そこで、例えば、算数で式の論拠を示したり、社会で地域の特産物を調べたら特産の理由まで示したりするなど、さまざまな教科で子どもが交流しながら考えを深める言語

活動の場をつくりたいと考えたのです」

また、書くことには慣れてきたものの、感じた思いを常に「楽しかった」で表すなど、表現力や語彙力は不十分な状況が見られた。考えを深め、交流するには、これらの力の向上も必要だと考えた。

同校には国語の研究の蓄積がある。研究の中心はあくまで国語としながらも、自然に他教科への広がりを意識するようになり、他教科・領域でも言語活動を充実させることにつながった。

◎実践

各教科・領域での言語活動を 年間指導計画に加筆

まず取り組んだのは、言語活動の全体計画の立案だ。09年度の1学期、研究の全体計画の中で、各教科・領域でどのような言語活動に取り組むのかを簡潔に示した（P.12図1）。

『考えを深める』には、どのような手法で、どのような教材で、という具体的な手立てが必要だ。言語活動はこれまでもずっと行ってきたことですが、考えを深めるための手立てとして改めて書き出しました」（山下校長）

夏休みには、全学年の年間指導計画に、各教科で各月に取り入れる言語活動を一覧にして示した（P.12図2）。従来から使用してい

た年間指導計画に、言語活動の要素を赤字で加筆した。課題研究主任の鈴木日登美先生は、その理由を次のように話す。

「当初は、もっと詳細な計画を立てるつもりでしたが、資料が多すぎると見なくなると思いました。年間指導計画1枚に言語活動の内容もまとめれば、週案に貼るなどして、すぐに見て、いつでも使えます。赤字部分を追加しただけなので、作成にも時間はかかりませんでした」

各教科・領域での言語活動に当たり、大学教授の指導によって、国語の授業と、その他



越谷市立蒲生小学校校長
山下 浩 Yamashita Hiroshi
「子どもにも教師にも、相手に対する思いやりを持って接していきたい」



越谷市立蒲生小学校
鈴木日登美 Suzuki Hitomi
課題研究主任、6学年担任。「教師になりたくて頑張った頃の原点を忘れないうようにしたい」



越谷市立蒲生小学校
飛田明子 Tobira Akiko
研究推進部長、音楽・書写専科。「子どもたちには何事にも本気で取り組んでほしい」



越谷市立蒲生小学校
森下久乃 Morishita Hisano
特別活動主任。「子どもたちに期待して、どこまでも子どもたちを信じ続けたい」

の教科の役割についての意識が変わったことは大きい。それまでは、国語でも子どもにも考えさせることを重視してきた。しかし、「作

図1 各教科・領域での具体的な取り組み(国語、社会、算数、特別活動の抜粋)

国語	社会	算数	特別活動	
<ul style="list-style-type: none"> 課題の明確化 目的意識をもって学習に取り組むための工夫 見通しをもった学習(カードの利用) テキストの音読 学習ルールの定着 漢字学習の定着 「ことのはノート」の活用(語彙力の向上) 	<ul style="list-style-type: none"> 学びタイムの充実 ことばのいずみ 朝の会のスピーチ 計画的読書活動 話し合いの仕方 交流の場 環境整備 	<ul style="list-style-type: none"> 情報を読み取り、思ったこと、考えたことなどを文章・図表・イラストで表現 新聞・パンフレット・リーフレット・記録文などのまとめ方の工夫 根拠や具体例を示しての発表 テキストの音読 	<ul style="list-style-type: none"> 課題解決学習の充実 計算の意味や仕方など具体物や言葉、式、図、数直線などを用いて順序良く表現 根拠や具体例を示しての発表 既習事項や解決がわかる板書の工夫 ふり返し テキストの音読 	<ul style="list-style-type: none"> 学級活動における話し合い活動の流れ、話し合いのルール、発表の仕方、聞き方の明確化 根拠や具体例を示しての発表 自分の考えを発信するための工夫(発表メモ、ふり返しカードなど) 司会グループの指導、支援

* 同校の資料を基に編集部で作成。表全体は、小誌ウェブサイトでご覧いただけます。http://benesse.jp/berd/ →HOME>情報誌ライブラリ(小学校向け)

議論を深める 言い方、聞き方を伝える

言語活動を意識し、一覧にしたことに加え、

者の思いを感じ取りなさい」と考えさせても、何も感じられない子もいる。どのような言葉で表現したら良いのか分からない子もいる。大学教授の助言を受けて、国語では聞き方、話し合い方などの方法論を学び、他教科でそれを生かしつつ、考えを深める活動をするという役割分担が明確になった。また、考えを深めるための方法や表現するための語彙は、教師が意識的に教えていくという共通認識が出来た。

「まず国語の授業を、子ども自身が何を学んだのか『わかる』授業にすることが大切なのだと考えました。また、表現力や語彙力が高まらないのは、具体的な手立ての指導が不十分だったと反省もしました。単に読書させたり、文章を書かせたりするだけでは語彙は増えません。教師が具体的な手立てを考へることが必要だと考えたのです」(鈴木先生)

同校の研究テーマ「自ら学び、自分の思いを豊かに表現できる子の育成」『わかる』授業の工夫(国語科を中心として)には、このような思いが込められている。

図2 4学年各教科の主な言語活動一覧表(社会、算数の抜粋)

★主な言語活動【具体的活動】一方法例

		1月	2月	3月
社会	単元名	<ul style="list-style-type: none"> 地図を広げて④ 山の多い小鹿野町⑥ お茶づくりのさかんな入間市⑥ 	<ul style="list-style-type: none"> 人形のまち岩槻⑥ 	<ul style="list-style-type: none"> まとめ②
	言語活動	<ul style="list-style-type: none"> 調べ学習 まとめ ふり返し 	<ul style="list-style-type: none"> ★書く【報告】 ★書く【まとめ】 ★書く【感想、意見】 	<ul style="list-style-type: none"> ノート・新聞・ワークシート クイズ・紙芝居・絵本など ノート、ワークシートなど
算数	単元名	<ul style="list-style-type: none"> 面積のはかり方と表し方① 変わり方調べ④ 	<ul style="list-style-type: none"> 小数のかけ算とわり算④ 直方体と立方体⑨ 	<ul style="list-style-type: none"> そろばん② ※かけ算を使って② ※4年のふくしゅう③
	言語活動	<ul style="list-style-type: none"> 自力解決 	<ul style="list-style-type: none"> ★読む【解釈】 ★書く【説明】 ★話す・聞く【話し合い】 ★書く【まとめ】 ふり返し 	<ul style="list-style-type: none"> 文、図、表などからの読み取り ノート、ワークシートなど 全体、グループ、ペア ノート、ワークシートなど ノート、ワークシートなど

* 同校の資料を基に編集部で作成。表全体、他学年のものは、小誌ウェブサイトでご覧いただけます。http://benesse.jp/berd/ →HOME>情報誌ライブラリ(小学校向け)

言語活動が考えを深める場となるための手立ても講じる。例えば、話し合いにおいて、議論が深まるような意見の言い方を指導する。友だちと意見がおおよそ同じでも、「似ているのですが……」と発表する。「質問はありませんか」と聞くのではなく、「もっと聞きたいことはありませんか」などと言うことだ。

一方、表現力や語彙力の向上のために始めたことの一つが「ことのはノート」だ。1冊1冊のノートを用意し、季節の言葉や難しい言葉、心に残った言葉などを、ノートに書き留めていく。これに加え、良いと思った時に

何のため？ 各教科での言語活動

使う言葉、あまり良くない時に使う言葉、嬉しい時に使う言葉などを集めた「いいカード」を、教師があらかじめ子どもに渡すこともある。このカードを「ことのはノート」に貼っておき、文章を書く際に「ことのはノート」の中から言葉を選ぶというわけだ。

「いいカード」は各教科で活用していると、研究推進部長で音楽担当の飛田明子先生は話す。

「新学習指導要領では、音楽の鑑賞について『楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表す』という項目が加わりました。そこで、『いいカード』を音楽でも取り入れました。楽曲を言葉で表す時に『やさしい』『きれい』という表現はあっても、『穏やか』という言葉知らない子どもがいます。こうした言葉をあらかじめヒントとして出すようにしています」

◎ 研究の成果

さまざまな意見の中で 考えや話し合いが深まる

09年度、特別活動主任の森下久乃先生が担任した4年生の学級では、4月から言語活動を意識して取り組んできた結果、11月の学級活動（P.14）で次のような成果が見られた。

「学級活動はまさに言語活動そのものです

が、反対意見が出にくい話し合いは、話し合い活動としては不十分です。友だちのことを否定するのではなく、違う意見があれば、それをしっかりと伝えることによって話し合いや自分の考えが深まります。子どもたちは、互いに意見を言い合いながらも折り合いをつけることが出来るようになりました。そのためには、人間関係が出来ていなければなりません。そうした学級集団をつくり、たとえ整った意見でなくても、自分の思いを伝え合える学級活動を目指して、少しずつ積み重ねた手応えを感じました」（森下先生）

森下先生は、言語活動の実践は子どもの意欲にもつながると実感している。

「自分たちで話し合って決めた学級活動の成功は大きな自信となり、『次も意見を言おう』という意欲につながります。たとえ失敗しても『次こそは』と思えるのです」

各教科における言語活動を一覧表にしたことは、授業の充実にもつながっているという。「言語活動を通じて、教師は何を身に付けさせたいかを強く意識し、子どももそれにより『何が分かったのか』を自覚できるようにになりました。例えば、以前はただ感想を書かせていた場面で、今は国語で学んだ文章の書き方を用いて、出来たこと、出来なかったことを書かせるようになりました。言葉で自分を分析し、振り返ることによって、考えも深まりますし、自分の成長がつかみやすくなりました

山下校長が重視する

校長としての役割

学習には感動を与えることが必要だと思います。その感動体験が、次の学びの意欲となるからです。

子どもたちが感動するような授業をするためには、さまざまな工夫が求められるでしょう。工夫して取り組んだ結果、たとえうまくいかなかったとしても、教師が意欲的に取り組めば、その熱意は子どもにも伝わるものです。そのことに教師自身が気づき、授業の工夫が自分の楽しみになっていけば、教師の喜びや成長にもつながります。そうした意欲を持った教師を育てていきたいと思えます。

す。それが子どもの次のステップにもつながると思えます」（飛田先生）

「具体的な活動内容を示したので、異動してきた教師も、本校の実践を理解し、授業に反映しやすくなりました。ベテラン教師から若手への継承も、うまく出来ているのではないかと思います」（山下校長）

小さなステップを少しずつ積み上げてきた結果が、今、表れてきていると同校は考える。「研究のための研究ではなく、常に子どもを見て研究を進めてきました。これからもチームワークを大切に、地道に続けていきたいと思えます」（鈴木先生）

4年生 言語活動を取り入れた特別(学級)活動の授業

議題「1/2成人式」をしよう

授業者 森下久乃先生 児童数 30人

ねらい

- みんなの思い出になるような楽しい1/2成人式にするために、どうしたら良いかを考えることが出来る
- 一人ひとりがよく考え、みんなに聞こえるような声で積極的に発表したり、友だちの意見をしっかり聞いたりして、話し合いに参加できる
「子どもたちは『話す』ことが出来ても、『話し合う』ことは出来ていませんでした。意見を出し合って、折り合いをつけていく活動にしたいと考えました」(森下先生)

授業の概要

◎議題

約1か月後の授業参観で「1/2成人式」を開く。式の当日に①何を
するのか、②どんな係があったら良いのかを話し合う。

◎進め方

計画委員の司会2人が中心になって話し合いを進める。
(計画委員は、全7班の持ち回り)

議論の展開

「1/2成人式」で何をするのかという話し合いの中で、児童Aが「自分の夢を発表したい」と意見を出した。これに対して、普段はおとなしい児童Bが「夢を言うのは反対です」と反対意見を出した。児童Bは「夢を持っていない人は、その時に嫌な気持ちになるからです」と反対の理由を説明した。

「私も反対です」と何人かが児童Bに賛同した。すると、児童Cが「夢を持っていないことは恥じゃないです。『今からこういうことを頑張りたい』ということを言えば良いと思います。そのための1/2成人式じゃないですか」と発言。

それでも、夢を持っていない児童たちは「やっぱり嫌です」と反対した。

すると、賛成の児童が「夢を持っていない子は『10歳になってこういうことが出来るようになった。これからは、こういうことが出来るようになりたい』と言えば良いと思います」と提案。

結局、反対していた児童たちも納得。夢を発表することを決定した。この間、森下先生が話すことはほとんどなく、子どもたちだけで議論を進めていった。

反対意見を交えて議論できた背景

今回の授業までに、4月から学級活動での話し合いを12回開いてきた。その過程で森下先生が指導してきたポイントは主に二つ。

一つは「見通し」を持つこと。4月当初、児童は出来そうにないことを発言するケースがあったが、森下先生は「出来るかどうか考えてごらん」と再考を促しながら、見通しを持って発言する力を伸ばしてきた。もう一つは「統合」すること。それぞれの考えや思いをすり合わせて、まとめていく力だ。

今回、おとなしい児童Bが反対意見を言えたのは、授業参観の時に夢を発表する自分を見通して「嫌だ」と考えたからだといえる。安心して反対意見を言える学級集団づくりも出来ていた。

他者と話し合い、考えを深めるための方法を、活動を通して教えてきたからこそ、それぞれの意見の折り合いをつけながら、「こういうことが出来るようになりたい」と発表することも夢に含まれるという、落とし所を見つける力が育まれたのだ。

授業づくりの考え方

児童から議題が出た時、授業の柱を決めるために文教大と越谷市教育委員会作成の『「言語活動の充実」のためのチェックシート』(P.8参

照)を参考にした。今回は、「B 思考、判断等の主な活動」の「関連づける」「比較する」「予想する」などの要素を意識した。

「各教科等で育てたい国語力」と「学びの技」により力を育む

秋田県横手市立十文字第一小学校

「かわり合って学ぶ子ども」の育成」をテーマに研究を進める横手市立十文字第一小学校。目指す子ども像に迫るために、「各教科等で育てたい国語力」を明確にし、そのために有効な言語活動を選択することで学びの質の向上を図っている。

課題

- 他者や資料とのかかわり合いの中で学びを深められない
- 子どもがこれまで身に付けてきた言語能力を高めていく場として、言語活動を充実させる必要があった

研究のねらい

- 学びを深める、目指す子ども像に迫るために、各教科等で付ける力を明確にし、言語能力を高め、言語活動を充実させる

実践

- 育成すべき力を「考える力」「感じる力」「想像する力」「表す力」から成る国語力と設定。各教科等に落とし込んだ「各教科等で育てたい国語力」の一覧表を作成。その実現のために言語活動を併せて書き込む
- 全教科に応用できる考え方などのコツを「学びの技」として子どもから抽出し、系統的に整理

成果

- さまざまな視点や考え方に共感したり、比較したりしながら、自分の考えを深められるようになった
- 言語活動を考える過程で目指す子ども像が明確になり、身に付けたい力を再確認できた

S c h o o l D a t a

◎1877（明治10）年開校。2007年度より2年間、文部科学省の国語力向上モデル事業推進校の指定を受ける。以来、児童の言語能力育成のための授業づくりに力を注ぐ。



校長 西野 茂先生

児童数 451人 学級数 16学級（うち特別支援学級2）

所在地 〒019-0523 秋田県横手市十文字町字十文字48

TEL 0182-42-1020

URL なし

公開研究会 未定

◎課題と研究のねらい

他とかかわり合う中で 学ぶ子どもを育成

十文字第一小学校では、「かかわり合って学ぶ子どもの育成」言語活動の充実を通して「」をテーマに、友だちの意見や資料など自分以外の考え方に触れ、かかわることで、学びの質を高め、確かな学力を身に付けられる子どもの育成に取り組む。研究主任の小坂靖尚先生は、次のように説明する。

「私たちが考えを深めたり新しい発見をしたりするには、他人の意見を聞いたり質問されたり、教材と向かい合ったりすることなどが不可欠です。そこで、考えを伝え合う、相手の考えを聴き合うなどといった言語活動が必要になるのです」

同校では、2007年度から2年間、文部科学省による国語力向上モデル事業推進校の指定を受け、国語力の研究を進めてきた。西野茂校長は、子どもの変容について次のように話す。

「地域性もあり、本校の児童は進んで取り組んだり、積極的に発言したりする力は弱いですが。しかし、これまでの取り組みを通して、資料を基に自分の考えをまとめたり、それらを踏まえて自分の意見を発表したりすることは出来るようになってきました」

10年度は、自分の考えを更に深める場として、言語活動を全教科の授業で充実させることが必要だと考えた。

◎実践

全教科について 育成すべき国語力を設定

同校では、07年度、学校の実態に則して次のように目指す子ども像を決め、教師間で共通理解を図ることから研究を始めた。

◎書かれてあることや友達の考えと、自分とのつながりを見つけて考えることができる子ども

◎言葉に関するアンテナを高く、広くもち、豊かな感性をもつことができる子ども

◎自分の考えの根拠をもって表現し伝えることで、よりよいコミュニケーションを成立させることができる子ども

次に、この子ども像に迫るために身に付けさせたい力を「考える力」「感じる力」「想像する力」「表す力」から成る国語力として、低・中・高学年ごとの発達段階に応じて具体化した。参考にしたのは、文化審議会の答申「これからの時代に求められる国語力について」(*)だ。

更に、付けたい力を授業に具体的に落とし込むために、「各教科等で育てたい国語力」



横手市立十文字第一小学校校長
西野茂 Nishino Shigeru



横手市立十文字第一小学校
小坂靖尚 Kosaka Yasuhisa



横手市立十文字第一小学校
小松尚子 Komatsu Nanako



横手市立十文字第一小学校
石井信恵 Ishii Nobue



横手市立十文字第一小学校
高橋美喜子 Takahashi Mikiko

としてまとめた(図1)。これには、国語力が表れる場としての言語活動と、目指す子どもの具体的な姿も書かれている。この理由を、教育専門監の小松尚子先生は次のように説明する。

「国語力は、国語科だけではなく、『すべての教科等の毎日の授業で養うものである』と

* 文化審議会の答申は、文部科学省のウェブサイトでご覧いただけます
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/bunka/toushin/04020301.htm

何のため？ 各教科での言語活動

図1 各教科等で育てたい国語力(国語、算数の抜粋)

	考える力	感じる力
国語	<ul style="list-style-type: none"> 何がどのように書かれてあるのか比べたり評価したりしながら読み取る力 	<ul style="list-style-type: none"> 言葉のもつ味わいとらえる力
算数	<ul style="list-style-type: none"> 既習の内容を使って新しい問題を考える力 複数の図や式の共通点や相違点をとらえる力 	<ul style="list-style-type: none"> 簡潔に解決できる方法を見極め、算数の美しさを感じる力 考えや発言の微妙な違いを感じる力
	想像する力	表す力
国語	<ul style="list-style-type: none"> 様子を表す言葉から、文章に表されている場面や心情を思いうかべる力 	<ul style="list-style-type: none"> 立場や自分の考えを明確にして意見を表す力
算数	<ul style="list-style-type: none"> 友達の図・式・言葉からどんなふうにかいたのかを思い描いたり、数・図・式・言葉をお互いに関連づけたりする力 	<ul style="list-style-type: none"> 数・図・式・言葉で自分の考えをかいいたり説明したりする力 算数用語の意味を考えながら説明の中で使う力

*同校の資料を基に編集部で作成。表全体は、小誌ウェブサイトでご覧いただけます
<http://benesse.jp/berd/> →HOME>情報誌ライブラリ(小学校向け)

図2 「学びの技」系統表(「聞くこと」の一部抜粋)

1年	2年	3年	4年	5年	6年
聞き取り	聞き取り	感想・質問	感想・質問	自分に置き換えて聞く	自分に置き換えて聞く
<ul style="list-style-type: none"> 相手の目を見る うなずき 大事なことの聴取 分からないことや詳しく聞きたいことを考えながら 感想 	<ul style="list-style-type: none"> 最後まで聞く 前後をよく考えながら 様子を思い浮かべながら 1つ1つを覚えながら(メモ・指を折りながら) 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の経験との結びつき 妥当性の判断 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の考えとの共通点や相違点 話の要点 聞き返し 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の考えへの取り入れ 似た経験はないか 話題のとらえ方の違いや共通点、差異点を明確に 	<ul style="list-style-type: none"> 資料や友達との思考との比較 思考の再構築
				想像しながら聞く	想像しながら聞く
				<ul style="list-style-type: none"> 話し手の思いをとらえながら 規則性の発見 必要な情報を取捨選択 	<ul style="list-style-type: none"> 話し手の意図をとらえながら 帰納的、演繹的に

*同校の資料を基に編集部で作成。他の項目を含む表全体は、小誌ウェブサイトでご覧いただけます
<http://benesse.jp/berd/> →HOME>情報誌ライブラリ(小学校向け)

いう考えに立っています。各教科で国語力を身に付けることで、最終目的である教科のねらいを達成する、目指す子ども像を実現することが出来るのです」

子ども自身が発見した「学びの技」を授業で活用

目指す力を付けるために、教科が異なっても応用できる考え方や表し方などのコツを、同校では「学びの技」と呼んでいる。これは、子ども自身が授業中に見つけたものだ。

「全教科で言語活動を行う中で、子ども自身が、ある教科で学んだことが他教科の授業でも使えると気づいたのです」(小松先生)
08年度には、それまでの蓄積を発達段階に沿って「『学びの技』系統表」として整理し

た(図2)。ただし、実際に活用する際には、「技」の名前は学年ごとに異なるという。3学年主任の石井信恵先生は次のように説明する。

「子どもから出てくる『学びの技』は、基本的に子どもの言葉のままにしています。例えば、2年生の、聞き取って理解する時の技の一つである『様子を思い浮かべながら』というのを、子どもは『頭の中のビデオで再生する』と表現しました。子どもらしい表現で、私たちの感覚では出てこない言葉ですが、子どもたちにとってはこの方が分かりやすいと考え、そのまま活用しています」

「学びの技」の中で重要なものは、学び方につまずいた時などに確認できるよう、各教室の壁面に貼り出し

教科のねらいに到達するための適切な言語活動を選択

同校ではこれらの実践を基に、次のような過程で授業をつくる。まず、教科のねらいや年間計画から本時のねらいを設定。そして、「各教科等で育てたい国語力」と照らし合わせ、その授業で付けたい国語力として具体的にイメージ。適切な言語活動を選択する。言

である。新たな技を発見したら、その都度掲示を増やすなど、学級ごとに工夫して活用している。

語活動では、「『学びの技』系統表」を参照し、6年間の学びの系統性に配慮しながら、使える技、身に付けさせたい技を取り入れる。

言語活動が効果的な学びの場になるように、日々の授業の運営、研究会の進め方も工夫する。まず、授業の進行では、発言しやすいう雰囲気づくりを心がける。友だちが良い意見を言ったらきちんと評価する習慣を付けたり、「分からないことや詳しく聞きたいことは聞く」という「学びの技」に沿って、聞きやすい雰囲気をつくったりする。互いの考えを深めるためには、異なる意見や反対意見も受け入れることが大切だと理解させ、子どもが気兼ねなく発言、交流できるような指導を日常的に行っている。

授業研究では、少人数でのグループ協議など、教師全員で取り組む体制づくりに配慮する。また、日常的に短い時間で実践を共有するなど、相談しやすい環境がつけられている。「先生方にも、指導に得手・不得手があります。気軽に悩みを相談できることが大切だと思います」（西野校長）

◎成果

相手に共感しながら 考えを深められるように

子どもの変化について、小坂先生は次のよ

うに話す。

「授業中、自分の意見に対して多くの反対意見が出された子どもにも『反対意見が出たことで考えは深まらなかった?』と聞くと、『深まった。別のことを言おうと思って、すぐ考えた』と答えました。友だちの考えとつながりを見つけて考えられる、目指す姿に近づいていると嬉しい驚きでした」

自分の考えを根拠と共に述べたり、他者と良いかかわりが出来たりするようにもなってきた。

「特活で何の活動を行うか話し合った時、始めは『ドッジボール』『フルーツバスケット』など、好き嫌いで意見が出されるだけでした。そこで、『Aに比べてBはこうだからAが良いという言い方をしてみよう』と提案すると、『かけっこドッジボールを比べるなら、友だちと協力できるドッジボールが良い』というように、発言が変わっていきました」（石井先生）

「一人が良い発表をすると、自然に拍手がわいたり、『いいね』という声が出るようになりました。人の意見をきちんと理解し、素直に評価する姿勢が出来てきたのだと思います」（2学年担任の高橋美喜子先生）

「学びの技」の効果も大きい。

「『学びの技』が別の場面でも活用できるかを意識することを促すうちに、子ども自ら『学びの技』が書かれている掲示の方を振り

返り、確認するようになりました。技の活用が習慣として定着し、目指す力を付けるための手段となっていると感じます」（石井先生）

言語活動の充実は、授業の改善にも効果があると、小松先生は感じている。

「言語活動を取り入れる過程で、育てたい子ども像を具体的にイメージします。各教科で付けたい力もより明確になり、授業をどう改善すべきか見えてきます」

学びの伝統を引き継いでいくことを大切に
する同校。更なる改善を重ねながら、研究が
進められていく。

西野校長が重視する

校長としての役割

先生方一人ひとりが十分に力を発揮できる環境づくりを大事にしています。そのため、「まずやってみましょう」という姿勢を大切にしながら、困ったことや問題があったら、まず私が誠意を持って対応に当たり、バックアップしていきたいと考えています。

今後、社会に出ていく子どもには、世界を相手にする機会が更に増えるでしょう。その時、自分が何を考え、相手に何を提供できるかを、きちんと説明できることが重要になるはず。私たちは、そのような子どもを育てていきたいと思っています。

何のため？ 各教科での言語活動

2年生 言語活動を取り入れた道徳の授業づくりのプロセス

主題 「助け合う友達」

授業者 高橋美喜子先生

児童数 31人

1 ねらい

友達と互いに仲良く助け合い、励まし合っていこうとする心情を育てる

2 ねらいに向かうための国語力を確認

「育てたい国語力」を参照し、本時に重視する国語力を確認。更に「『学びの技』系統表」を参考に、本時で生み出したい「学びの技」を検討。「相づちを打ちながら」聞く、「はきはきと」話すなどを考えた。

図3 各教科等で育てたい国語力(道徳の抜粋)

	考える力	感じる力
道徳	資料と対話したり友達の意見を聞き参考にしたりしながら、自分を見つめる力	資料の登場人物や友達の気持ち、立場に共感する力
言語活動	<ul style="list-style-type: none"> 話し合い 学習シートへの書き込み 	<ul style="list-style-type: none"> 話し合い 資料の読み

	想像する力	表す力
道徳	資料や友達の言葉から、思いを察する力	自分を見つめたことを伝える力
言語活動	<ul style="list-style-type: none"> 吹き出し 挿絵の説明 動作化 役割演技 	<ul style="list-style-type: none"> 話し合い 手紙、お礼状、招待状 吹き出し 行動の記録表 心のノート

* 同校の資料を基に編集部で作成。表全体は小誌ウェブサイトでご覧いただけます
<http://benesse.jp/berd/> →HOME>情報誌ライブラリ(小学校向け)

今回は、以下について重きを置くと考えた。

考える力

資料と対話したり、友達の意見を参考にしたりしながら、自分を見つめさせる

感じる力

相手の気持ちや立場に共感させる

想像する力

資料や友達の言葉から、思いを察することができるとさせる

3 ねらいにせまるための言語活動を選択

ある動物が他の動物とのかかわりを通じて、自己中心的な気持ちに変化していく物語を読み、動物たちの心情を話し合わせる。話し合いの中で、話し手が安心して、「相づちを打つ」ことが大切だと考えて指導。子どもはこの技を「うんうん」と呼ぶ。登場する動物の心の動きに対して、子どもたちの素直な気持ちや言葉をより引き出すために、「役割演技」をさせた。

また、授業を通して考えたことを表すために、登場する動物にあてた「手紙」を書かせた。



友だちの発表は真剣に聞き合う。発表の内容を聞いて、拍手をしたり、「すごいね」と賞賛したりするなど、認め合う雰囲気が出来てきた

4 研究会での検討観点と授業の振り返り

- 1 ねらいに向けた適切な言語活動だったか
- 2 子どもの実態に則した心に響く資料選択、資料提示、資料活用だったか

- ・ 6人前後の小グループに分かれ、上記の観点でグループ協議を実施。その後、全体協議を進めた。ねらいに到達しているかどうかは、子どもたちに書かせた手紙を見て検討した。
- ・ 結果として、言語活動として「役割演技」を取り入れることで、子どもたちはさまざまな登場動物の心情に共感し、考えることが出来た。また、周りの子どもの発見に対し、「そうも考えられるんだ」という声が自然に上がり、友だちとのかかわりが深まった。
- ・ 「役割演技を取り入れたことで、書いたものを発表するのは異なる素直な言葉をたくさん引き出すことが出来ました。資料や友だちの考えを基に考える力を付ける上で、有効だったと思います。『学びの技』についても『〇〇は使えるね!』という声から出てくるようになり、嬉しく思います」(高橋先生)

* 同校の10年度「第2学年1組 道徳学習指導案」を基に編集部で作成

「話し合い方シート」を用いて 少数数での交流を活発化

香川県綾川町立滝宮小学校

綾川町立滝宮小学校は、思考力・判断力・表現力などをベースとする「確かな学び」を育む手段として言語活動を重視。各教科に少数数での「交流」活動を取り入れるなどして言語活動の充実を図る。一人ひとりの子どもが主体的に授業に参加し、活動を通じて考える力を身に付けている。

課題

- 自分の考えを明確にして書いてまとめる力は付いてきたが、自分の考えを深めるまでには至っていなかった
- 相手の気持ちを考えずに発した言葉などから人間関係が悪化することがあった

研究のねらい

- 子どもが考えを深められる活動の手立てを検討
- 活動を通じて、友だちを尊重し、円滑にコミュニケーションを取れる人間関係をつくる

実践

- 考えを交流する過程で、ペアやグループでの活動を取り入れ、すべての子どもが考える場を設ける
- 「話し合い方シート」（話型）などで「交流」における話し合いの活発化を図る

成果

- 全員が活動に参加し、一人ひとりの子どもが課題に向かって自ら考えるようになった
- 「話型」を基にすることで、授業で適切な話し方に沿う交流が活発になった

S c h o o l D a t a

◎1872（明治5）年開校。高松市内へは車で30分ほど。健康や体力づくりにも力を入れる。2009年度には香川県の「言語活動の充実促進モデル事業」の指定を受け、研究を続ける。



校長 西浦雅弘先生

児童数 311人 学級数 15学級（うち特別支援学級3）

所在地 〒761-2305 香川県綾歌郡綾川町滝宮1095-1

TEL 087-876-1183

URL <http://www.town.ayagawa.kagawa.jp/ed/takinomiya-e/>

公開研究会 2010年11月17日

何のため？ 各教科での言語活動

◎課題と研究のねらい

思考を深めるために 考えを評価される場が必要

滝宮小学校では、「確かな学びをつくる児童の育成」を目指している。西浦雅弘校長は次のように話す。

「『確かな学びをつくる児童』とは、学び続けようとする児童、自ら課題を見つけ、判断したり、より良く問題を解決したりしようとする児童、新しい知を創造しようとし、自分の成長を自覚できる児童です。言語活動の充実が最終的な目標ではありません。言語活動を通して言語力を高める中で、『確かな学び』につながる思考力・判断力・表現力を育てたいと考えています」

言語活動はこれまでも行ってきたことであり、思考力・判断力・表現力を育てる唯一の方法ではないが、『確かな学び』にもつながる感情や情緒、コミュニケーション能力を培うという意味でも必要なことだと位置づける。香川県の「言語活動の充実促進モデル事業」の指定を受けた2009年度に、改めて全教科で言語活動について考えた。研究主任の井手上典弘先生は次のように話す。

「『言語活動とは何か』を話し合うことから始めました。最初は、国語以外の教科の言語活動をイメージしにくいという教師もいまし

たが、『国語で学んだ情報のまとめ方は、社会の新聞作りに生かせる』など、国語と各教科の関連も確認しながら考えていきました」

まず、全教科で重点を置いたのは、「書いてまとめる」作業を通して自分の考えを明確にすることだ。発表やグループでの話し合いをするためには、自分の考えを持つ必要があり、そのためには「書く」ことが有効だと考えたのだ。どの授業にも最後にまとめを書く時間を設けた結果、子どもたちの姿が変化してきたという。

「最初は『楽しかった』『面白かった』といった感想が目立ちましたが、次第に授業ごとの課題に照らし合わせて自分の考えを書くようになりました。『書く』ことが好きになった』と言う子どもも増えました」（西浦校長）

しかし、書く力は伸びたのだが、書くことで自分の考えが完結してしまい、それ以上に考えは深まらなかつた。教務主任の谷口基生は次のように説明する。

「自分の考えを表現して評価される場がなければ、思考は深まりません。友だちから賛成されて自信を持ったり、反対されて考え直したりする体験を通して、思考力・判断力・表現力が育つのではないかと考えました」

研究を進める上でも、どこかに焦点化をした方が深まりが出ると考えていたこともあり、10年度は、ペアやグループでの『交流』の場面に研究の重点を移した。そこでは、コ

ミュニケーション能力の育成も重視する。

「本校の児童は周囲とかかわるのは好きですが、例えば、友だちに指摘する際、『やめようよ』と言わずに、『やめるよ』などと感情むき出しの言葉を発し、衝突するような場面も見られました。交流を通して互いの考えを尊重し合う関係を育てて、温かい人間関係をつくりたいと考えています」（谷口先生）

◎実践

全員が参加しやすい ペア、グループでの交流

各教科の授業は、基本的に「課題をつかむ」「考えをもつ」「交流する」「まとめる」の学



滝宮町立滝宮小学校校長
西浦雅弘 Nishihara Masahiro
「何より先に子どものことを考える。『是々非々』の考えの下、子どもにとって良いことか悪いことかを常に考えたい」



滝宮町立滝宮小学校
教務主任、5学年担任。「日々の何げない習慣やリズムを大切にすることで、子どもが自律・自立する力を育てたい」



滝宮町立滝宮小学校
研究主任、4学年担任。「自分の心に花を咲かせ、相手の心の花に気づく人になってほしい」

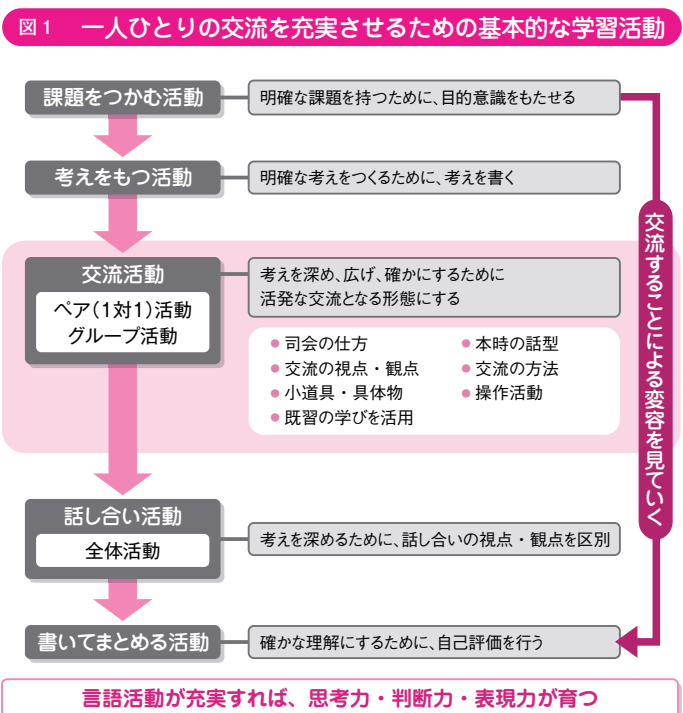
習過程で構成されている(図1)。

まず、問題を提起して課題意識を持たせる。教師が一方的に提示するのではなく、例えば、算数で概念的な問題を扱う場合は、具体物を操作する作業などを取り入れ、「なぜだろう?」という気持ち自然にわくように工夫する。研究授業として行われた5年生の算数「三角形・四角形の角」の授業(P.24)では、実際に三角形の角度を測る作業を通して課題意識を深めた。

次に一人ひとりがノートに予想を書き、自分の考えを明確にする。これにより、授業の見通しを持ち、「友だちがどう考えたかを知りたい」という気持ちも生まれ、交流が活発化する。更に一人ひとりの考えを深めるために、10年度から、1・2年生はペア、3年生以降は3、4人のグループでの話し合いを中心とした交流活動を取り入れた。

「クラス全体での話し合いでは、押し黙ったり、自分だけ話したりする子どもがいて、全員が参加する雰囲気にはなりにくい状況でした。そこで、クラス全体で話し合う前に少人数の話し合いの場を設けるようにしました」(井手上先生)

子どもは交流を通して、自分の考えに自信を持つたり、修正したりして考えを深めていく。この後は各グループの考えを集約し、クラス全体の話し合いにつなげる。今回の研究授業では、話し合いによってグループの意見



「話し合い方シート」で交流の活発化を図る

をまとめ、画用紙に記入。発表者がクラス全体に向けて発表した。そして授業の最後に、一人ひとりがノートにまとめを記入する。

もう一つ、交流を活発にするために活用しているのが「話し合い方シート」だ(図2)。

これは、言葉遣いや話し合いの流れを型にしたものだ。例えば、意見を出し合う時は、司会者が「○○さん、わかったことを言ってください」と順番に声を掛ける。質問時は「○○さんどうぞ」「○○さんのかわりに答えら

れる人はいませんか」と問い掛けるように示されている。現在、各クラスで試し、発達段階や授業内容に応じて使用する「ひな型」の作成を進めている。

「何もない状態で話し合いを始めると、『最初に誰が発言するか』と困ったり、他の子どもの話をさげさげで発言したり、乱暴な言い方になってしまったりして交流がスムーズに進みません。ルールを定めて『フォーマル』な話し合いにすることで、場をわきまえて『イン

フォーマル』な言葉を出さずに意見を聞き合う気持ちが生まれます」(谷口先生)
司会・書記・発表係は、事前に子ども同士で決めておく。

成果

活動を通じて帰納的な考え方を身に付ける

算数で言語活動を取り入れる先には、思考力の育成がある。授業では、グループごとに異なる多様な三角形を作成し、角度の測り方

何のため？ 各教科での言語活動

図2 「話し合い方シート」

今日の授業で使用するグループでの話し合い方

【このシートは、各教科の授業で活用し、意見を述べ合ったり、意見を出し合ったりするための話し合いのシートです。自分や自分のグループの考えを伝えたり、相手の考えを聞き取ったりします。】

グループで話し合うときの順番のことは

- ① 話し合いの順番を決める
 今から、OOについて話し合います。(発表し合います。) 順番をずらすOOです。自分や自分のグループの考えを伝えたり、相手の考えを聞き取ったりします。
- ② 一人ひとりが自分の考えを伝える
 OOさん、おっしゃることを書いてください。(順番に書いていく。) わたしは、OOについて調べました。OOの方法で調べました。そうすると、OOということがわかりました。OOについてはまだわかりません。
- ③ 質問をします
 質問があれば教えてください。 OOさんどうですか。今の質問について、OOさんにお答えください。(質問は自分から) OOさんの考えに同意する人はいますか。(同意する人は手を挙げて) では、全体の話し合いで、学校のみんなに伝えてもらいましょう。
- ④ グループの考えをまとめる
 みんなの意見をまとめてOOOOということになります。それでいいですか。 それでは、これをわたしたちのグループの意見として発表します。
- ⑤ お礼
 みんなの考えがよかったです。聞いていただきました。ありがとうございました。これでグループの話し合いが完了です。(拍手)

交流の結果を全体に発表するとき

わたしたちのグループは、OOグループです。話し合った結果、「OOOO」という意見になりました。でも、OOについて疑問があり、たれも答えられなかったため、これとされる人がいます。以上でOOグループの発表を終わります。



上記のシートは、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトから加工可能な形式でダウンロードできます

<http://benesse.jp/berd/>
→HOME>情報誌ライブラリ(小学校向け)

た。クラス全体としてだけでなく、一人ひとりの子どもにとって良い授業だったと感じました」(西浦校長) 更に、交流を中心とした言語活動は、学習だけでなく、日常生活にも良い影響があるという。谷口先生は、言語活動が子どものコミュニケーション能力にもたらす効果を次のように説明する。

も複数提示した。これには、出来るだけ多くのデータを集めて帰納的に考える方法を身に付けるねらいがある。

「自分が作った三角形だけを見るのではなく、グループやクラスでの交流を通して、三角形の形や測り方が異なっても180度になると理解させるのがねらいです。この体験で、多くの事象から普遍的な事実を導き出す、帰納的な考え方を実感しながら理解できます。また、自分の体験から考えたことを大切にすることも必要です」(谷口先生)

例えば、あるグループに、最後まで「どうしても180度にならない。納得できない」と主張する子どもがいた。これは、分度器で鋭角の角を測る際の誤差によるものだったが、自分の経験を基に考えを進めた結果である。更に、クラス全体への発表を通して、こ

の主張は誤差という概念を教えることに生かされた。

このように、「自分の発言が生かされた」「皆に認められた」という実感は自信となり、「また発言したい」という気持ちが芽生える。その気持ちが授業への意欲を高め、より多くの子どもが積極的に学び合いに参加するという循環が生まれていく。

同校は、話す、聞く、書く、読むといったあらゆる場面が言語活動だと考えている。しかし、一斉授業では、分かる子どもだけが積極的になり、言語活動が十分に深まりにくい。その点、どの子どもにも発言の機会が与えられる少人数での交流が持つ意義は大きい。

「研究授業でも、すべての子どもが『お客さん』にならずに参加し、他の子どもと協力して課題解決に向かう学習が出来ていました。クラス全体としてだけでなく、一人ひとりの子どもにとって良い授業だったと感じました」(西浦校長)

西浦校長が重視する

校長としての役割

子どもにとっても先生方にとっても楽しい学校をつくるのが、校長の役割と考えています。そのために教師のチーム力を大切に、互いの不足を補い合いながら1+1=2以上になるような、先生方一人ひとりがかわって、成果を実感できるような組織づくりを心掛けています。

学校が一丸となるには、先生方が共通した目標を持つことも大切です。研究の目的、内容、方法等を分かりやすくしたり、研究会では成果と課題を明確にしたりして、全員で共通理解を図ることを大切にしています。

「自分の考えを口に出すのは勇気のいることです。『黙っていれば失敗しない』と危険を避けようとしても不思議ではありません。しかし、だからこそ一人ひとりの発言が求められる言語活動の場を授業に設けることが必要です。そのような状況に置かれたら、子どもは『どうしたら良いのか』という切実な課題を感じるでしょう。それを乗り越え、勇気を出して発言することで、コミュニケーション能力は育っていくと思います」

言語活動の充実を図る研究は、全教師が参加する研究会で推進されている。次ページから、研究授業と事後研究会の様子を紹介する。

5年生 言語活動を取り入れた算数の授業

単元名「三角形・四角形の角」

授業者 谷口 基先生

児童数 27人

ねらい

三角形の三つの角の大きさの和が 180° になることを帰納的に結論づけて理解する。前時の授業で、ある三角形では 180° になることを確認したが、「一つの例だけで言えるのだろうか」という疑問が残っていた。少人数グループ、およびクラス全体での交流を通して、さまざまな形の三角形が上記の仮説に当てはまるかどうかを確かめ、結論づけて、きまりを理解する。

	時間	学習活動	教師の手立て・工夫・成果
課題をつかむ	0分	【1】前時の振り返りと本時のめあての確認 ◎前時の振り返り 前時の最後に疑問として残ったことを思い出し、本時のめあてを確認する <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> めあて：どんな三角形でも三つの角の和が180°になると言ってよいのかどうか調べよう </div>	<ul style="list-style-type: none"> 一つの例では、きまりとは言えないのではないかと疑問を再確認する ▶前時からの学習の連続性が意識される
	3分	◎予想を聞く 予想と共に、 180° に「なる」「ならない」のそれぞれの理由を述べる。この段階では、「ならない」が半数以上を占めた	<ul style="list-style-type: none"> 「なる」「ならない」の双方の理由を発表させる ▶「ならない」という予想も全体に広げることで、課題意識が全員のものとなる
考えをもつ	9分	【2】三角形の種類別グループで確かめる 言語活動 ◎個人作業で確かめる トレーシングペーパーに三角形を描いて切り取り、いろいろな方法で角度を確かめる  	<ul style="list-style-type: none"> 「正三角形」「二等辺三角形」「平べった三角形」「つる三角形」など、グループごとに形の異なる三角形を扱う。グループ内では「分度器法」「破りくっつけ法」「折り折り法」と、一人ひとり異なる方法で角度を測る ▶一般的な三角形のイメージと異なる形があることで、「180°になりそう」という先入観を防ぐ。調べ方を変えることで、どの方法でも180°になることを確認でき、帰納的に結論づけられるようになる 「学習シート」に結果を書く時は、予想通りだったか、異なつたかを踏まえて書くように指示 ▶自分の考えの変化を明確に意識できる
	19分	◎結果をグループ内でまとめる 1グループ3、4人で、同種類の三角形について、異なる方法で角度を測った結果を話し合う。グループの考えとして画用紙にまとめる 	<ul style="list-style-type: none"> 「話し合い方シート」を使用する ▶シートの流れに沿って話し合いの流れや言葉遣いをルール化することで、すべての子どもが発言でき、話し合いが進む グループの考えを画用紙にまとめる ▶書く過程で思考を整理できると共に、まとめる過程での交流が生まれる
交流する	37分	【3】三角形の三つの角の和のきまりについて、その確かさを全体で話し合う 言語活動 ◎全体で発表 各グループの発表係が前に出て、異なる種類の三角形の結果を発表し合う 	<ul style="list-style-type: none"> 各グループの発表係がグループの考えを発表 ▶発表の仕方、話の聞き方を身に付けられる 各グループの画用紙を黒板に並べて掲示 ▶各グループの結果を一覧することで、形が異なっても180°になることを理解できる
まとめる	50分	【4】本時の学習を振り返る ◎ノートにまとめを書き、数人が発表 最後に「きまり」の成立に納得しきれない子どもに発表させた 児童A「測りやすい三角形は 180° になることが分かりました。でも、測りにくい三角形については分かりませんでした。まだ納得できていません」 児童B「すべての三角形が 180° になることが分かりました。小さい三角形は測りにくいことが分かりました」	<ul style="list-style-type: none"> あえて全体としてのまとめを示さず、個々の考えでまとめを書くようにする ▶自分の考えを大切にできる 結果に納得していない子どものまとめを発表させた ▶この考えを認めることで、操作活動を通じて自分が出した結果を基に、帰納的に考える大切さを伝えられる 

*同校の指導案資料を基に編集部で作成

何のため？ 各教科での言語活動

授業後の研究会

研究授業の後は、全教師が参加して研究会を行う。3年生と5年生の研究授業を行ったこの日は、1～3年生の教師が3年生、4～6年生の教師が5年生の授業について検討した後、全体で話し合いの内容を共有した。

研究会の流れ

1 授業者からの説明

授業のねらい、思い通りに展開したことや意図していなかったことなどを説明

2 質疑応答

不明な点などについて、授業者に質問

3 学年ごとのグループに分かれて討論

学年ごとに三つのグループに分かれて、20分間ほど討論。良かった点はピンク色、改善が望まれる点は青色の付箋紙に記入して画用紙に貼り、全体で共有したいことを整理



4 各グループからの発表

検討した内容を発表。各グループが5分間ほどでポイントを絞って意見を言う。続いて、指摘を受けて、授業者が感じたことなどを説明



5 低学年と高学年が合流

それぞれ話し合ったポイントを簡潔に説明し合う。付箋紙が貼られた画用紙も共有

6 指導主事の先生による講評

指導主事の先生からの指導、講評を聞く

研究会で出た意見

◎良かった点

- 「話し合い方シート」(話型)によってスムーズに話し合っていることに驚いた。伝えたい内容を話す際の補助になっている。
- 交流ではしっかり話し合いが出来ており、三角形の角の和が180°になることを確認し合っていた。
- 180°にならなかった子どもの三角形を別の子どもが異なる方法で測り直したり、つまづいている子どもにアドバイスをしたり、グループ内で協力して学習を進める姿勢が多く見られた。
- 自分の考えをノートに書く力が付いている。論理的に結果を予想する力も高まっていると感じた。
- 「予想と関係つけて結果を書くように」という教師の助言により、言語活動が促されていた。
- 自分でつくった三角形なので一生懸命に取り組んでいた。
- 子どもの考えの中から課題設定を行っているため、強い課題意識を持って取り組んでいた。

◎改善点

- 交流の意義が伝わってきたが、発表の準備をするまでに少し時間がかなり過ぎかもしれない。画用紙に書き込む作業に慣れていない子どもも

いるので、小黒板を使っても良いのではないかな。

- ほぼすべての子どもが180°になることを理解できていたようだが、より実感を持って理解させるために、最後に一覧表のようなものを作っても良いかもしれない。
 - 話し合いの型があることでスムーズに交流できたが、一方では縛られてしまう面もありそうだ。型の使い方については、更なる検討が必要だと感じる。
- ◎谷口先生より
- 授業以外の場では、感情むき出しの言葉が見られるが、「話し合い方シート」を用いて、「フォーマル」な話し合いの場にしたことで、感情的な言葉はあまり出なかった。まだ「話し合い方シート」に慣れていない子どもも多いため、今後、実践を重ねていきたい。
 - 画用紙にまとめる過程で、「この言葉も必要ではないか」などと、交流が生まれて思考が深まる効果をねらっており、実際、その通りになった。ただし、確かに、グループごとの画用紙への記入は時間がかかった。ペンの色や装飾など、学習とは無関係なことにこだわって時間がかかってしまった点については改善の余地がある。

研究会告知

2010年11月17日に公開研究発表会が実施されます。言語活動の充実をテーマとして、2年生(国語)、3年生(音楽)、4年生(算数)、6年生(総合的な学習の時間)の授業が公開される予定です。詳細(二次案内)は10月頃に滝宮小学校のウェブサイトに掲載されます。



「分からないからやってみる」「研究で1年間で全学年の担任がT1に」

神奈川県座間市立入谷小学校

座間市立入谷小学校では、全学年の担任が5・6年生の外国語活動の授業を行っている。全員で考え、実践してみることを大切に研究を深め、研究開始からわずか1年で、どの担任も外国語活動を指導できるようになった。

すべての教師が
チームに分かれて
指導案を考える

神奈川県はほぼ中央部に位置する座間市立入谷小学校は、県と市の研究委託を受けたのをきっかけに、2009年度から5・6年生で外国語活動を行っている。10年度の年間授業時間は25時間。同校の特徴は、1～4年生の担任も当事者意識を持つために、教師全員で研究を行い、授業も全員で行っている点だ。

「5・6年生を担任する先生は、年度ごとに異なります。新学習指導要領の全面実施に備えて、どの先生も授業を出来る状態にする必要がある

と考えました」(直井恵子教頭)

研究の初年度、1～4年生の担任は、1学期は外国語活動の授業を参観し、2学期はT2として、3学期はT1として授業を行った。指導案や教材も、長期休業期間を利用して5・6年生の担任と一緒に作った。

「見学だけでなく担任役として授業を行い、指導案や教材も作ることで、『自分達は関係ないし、何をしたら良いかわからない』から『分からないからこそやってみよう、何か出来ることはないか』と、当事者意識が高まります。そこから外国語活動の意義や楽しさに気付き、指導力を高めたいという思いが生まれま

す」(前田善仁総括教諭〈教務担当〉)

直井教頭は、全員が携わった指導

案作りの様子を次のように話す。

「子どもが楽しいと思える活動をするためには、まず教師が活動の楽しさを知らなければなりません。そこで、先生同士で『英語ノート』にあるゲームを行うなど、体験を重視し、その中で出た提案や工夫を、指導案や教材に生かしました。先生方は、『このゲームはぜひ子どもたちにも体験させたい』など、前向きに取り組んでいました」

研究は、5・6年生計6学級の担任がリーダーとなり、「5年1組チーム」「5年2組チーム」というように、1～4年生の担任を2～3人ずつ各チームに割り振って行う。担当する学級を固定することで、児童一人ひとりの性格や発言への積極性

を把握できる。他学年の担任が活動を行う場合、同じチームの教師が互いの学級を見合えるよう時間割を調整し、自習を減らしている。

こうした取り組みの結果、ほとんどの教師は外国語活動の経験が無く



アクティビティでは、相手と目と目を合わせてコミュニケーションを図ることを重視している。授業の最後はALTと目を合わせてハイタッチする



ゲームやアクティビティは教師同士で体験し、もっと盛り上げるにはどうするかなど、実際の授業に生かす方法を話し合う。「授業のない長期休暇中なら、1〜4年生の先生への負担を減らせます」（直井教頭）

**児童の9割が
「外国人とかかわりたい」
教師のやる気も向上**

児童の反応も、教師の意欲を高めたという。

「児童に書いてもらった授業の感

ったにもかかわらず、わずか1年間で活動を主導できるまでになった。ただ、研究開始当初は、消極的な姿勢の教師がいたのも事実。そうした教師の気持ちを盛り上げたのは管理職だったと、前田先生は説明する。「前校長が、全員で研究を行う必要性を説明し、理解を求めてくれました。会議でも、研究推進の提案に率先して賛成してくれました」

想を教師全員で読みました。『楽しかった』『またしたい』といった声は、初めて授業を行った先生の励みとなり、改善点や反省点を話し合うきっかけとなりました」（前田先生）

「今日のひとこと活動」は、児童に伝えたいという教師の意欲から生まれた。毎朝の会議で教師全員が「Let's take attendance. "Any volunteers?"などの教室英語の発音を練習し、意味と使い方を覚える。「使える教室英語を増やしたい」という先生方の声を受けて始めました。どのフレーズを使うかは、中学校で英語を教えていた直井教頭にアドバイスしてもらいます」（前田先生）

直井教頭は、活動を主導する教師に外国語の専門知識がなくても、活動自体は成り立つと話す。

「活動の目的は、あくまでも児童のコミュニケーション能力の育成です。外国語が分からなければ、ALTに聞いても良いし、日本語で話しても良いと、先生方に伝えていきます」10年度に5年生担任となった研究主任の西川麻里子先生は、日本語を使う利点を次のように説明する。

「外国語を使わなければいけないと思うと、私たちはどうしても単語や文法を正しく使おうと意識し、気負って緊張してしまいます。無理をせずに日本語で話す方が、活動をス

ムーズに進められますし、児童の様子にも目が届きます」

外国語活動を始めて以来、コミュニケーションへの児童の意欲も高まっているという。09年度の6年生へのアンケートでは、「外国人とかかわってみたい」という回答が9割以上を占めた。平野昭雄校長は今後の取り組みについて、次のように話す。「本校の児童は、元気良く挨拶をする、目を見て話を聞くといったコミュニケーションの基礎が出来ています。その良さをもっと伸ばせる外国語活動となるように、年間35時間の指導案を作るなど、皆でより良い活動を考えていきます」

School Data

神奈川県座間市立入谷小学校

概要 1978(昭和53)年開校。神奈川県と座間市から研究指定を受けた2009年度から、担任主導の外国語活動に取り組み、児童のコミュニケーション能力を伸ばす活動を続けている。

校長 平野昭雄先生

児童数 473人

学級数 17学級(うち特別支援学級2)

所在地 〒252-0024 神奈川県座間市入谷2-345

TEL 046-253-7211

URL <http://members2.jcom.home.ne.jp/iriya-ps/>

研究発表会予定 2011年1月28日



座間市立入谷小学校
平野昭雄 Hirano Akio

校長
「『散慮逍遥』。問題・課題に、積極的に取り組む教師でありたい」



座間市立入谷小学校
直井恵子 Naoi Keiko

教頭
「地域の方と共に、笑顔いっぱい豊かな子どもたちを育てていきたい」



座間市立入谷小学校
前田善仁 Maeda Yoshihito

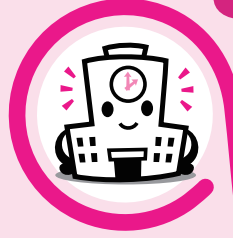
総括教諭(教務担当)
「子どもたちと一緒に行動し、教え伝えられながら成長する存在でありたい」



座間市立入谷小学校
西川麻里子 Nishikawa Mariko

研究主任 5学年担任
「子どもたち一人ひとりの良さを伸ばすことが出来るように、頑張りたい」

つながる



学校と家庭の学び

思いやりの心と 知的好奇心を育む「弁当の日」

岐阜県美濃加茂市立蜂屋小学校

美濃加茂市立蜂屋小学校では、児童の食への関心や知的好奇心を高めようと、5・6年生が自分で作った弁当を持参する日を設けている。保護者と一緒に献立を考えたり、調理したりすることで、家庭でのコミュニケーションが深まるきっかけにもなっている。

複数の弁当作りのコースを設け 楽しく参加できるように配慮

岐阜県の南部に位置する美濃加茂市立蜂屋小学校では、2009年度から、5・6年生で、給食の代わりに児童が家で作った弁当を持参して食べる「弁当の日」を年に数回設けている。これはPTAが学校に提案して始まった取り組みで、坂井哲前PTA会長は、そのねらいを次のように説明する。

「最終的な目標は、将来、自炊できる生活力を身に付けることです。

その第一歩として、自分で食事を作ることの楽しさを知り、『自分にも出来た』という自信を付けてほしい。そして、家族や周囲の人に感謝や思いやりの気持ちを持って接することの大切さを学んでほしいのです。食事は、自分や家族が生きるために必要なことなので、そうした大切さを実感しやすいと思いました」

弁当作りは、①すべて児童が調理する「完璧コース」、②保護者と一緒におかずを作る「おすすめコース」、③児童が自分でおにぎりを作り、おかずは保護者に作ってもらう

「基礎コース」がある。児童は自分に合った好きなコースを選ぶ。あまり堅苦しく構えず、子どもにとって楽しい取り組みにすることを優先したためだ。どのコースであっても、献立作りや材料の買い物は保護者と一緒に行うなど、学校とPTAが、保護者のサポートを呼び掛けている。

「弁当の日」は、09年度は3学期に2回行われた。10年度は10月以降に3回行う予定で、食中毒予防のため、暑い季節には実施しない。共働きの家庭でも時間が取りやすい日曜日に準備が出来るよう、月曜日に設

定し、当日は給食がないので、担任も自作の弁当を持参する。

学校は、PTAからの提案を快く受け入れた。「弁当の日」には給食を止める必要があるが、そのための申請手続きなどに協力した。

渡邊由美子校長は、「弁当の日」に関するPTAとの役割分担について、次のように話す。

「学校は、家庭科の授業で食に関する知識や技能を教えますが、それを定着させるためには、家庭での実践が必要です。弁当作りはその実践の一つですから、PTAが主体的に

進め、学校が協力する現在のスタイルが適していると考えています」

友だち同士のおかずの交換が相手への思いやりを育む

事前準備として、学校からの案内や学級通信などで家庭に告知し、子どもが弁当を忘れないようにした。また、手作りしたいが何を作れば良いのか分からない子どもがいるはずだと考え、家庭科でアスパラのベークン巻きや粉ふきいもなどの作り方を取り上げた。

第1回の「弁当の日」は、「完璧コース」「おすすすめコース」を選ぶ児童が約9割を占めた(P.30図1)。09年度に6年生を担当した高木健太郎先生は、当日の児童の様子を次のように説明する。

「クラスでは、『先生もお弁当を作るから、みんなも頑張つて作っておいで』と呼び掛けました。『基礎コース』を選ぶ子どもが多数いるだろうと思っていました。中には、朝4時に起きておかずを作ったという子どももいて、予想以上の頑張りをを見せてくれました。家庭科で習ったメニューを作ってきた子どももいました。同じメニューでも、子どもに

よって仕上がりが違い、表現力や個性が表れます。食事中は友だち同士でおかずを交換し、大変だった点や工夫した点について話し合っていました。弁当作りの大変さを体験したからこそ、友だちが一生懸命作ったおかずをくれた時の嬉しさは格別です。自然と、自分もお返しをするという、相手への思いやりを育む機会となつていきます。また、友だちのおかずを見ることが、作り方を知ろうとしたり、『今度は自分もこんなおかずを作ろう』という気持ちが起こつたりするようです」

実際、1回目と比べて2回目の方が、「完璧コース」を選ぶ児童の割合が増加したという。更に、保護者の心境も変化した。

岐阜県美濃加茂市立蜂屋小学校

◎1873(明治6)年創立の歴史ある学校。2009年度より、食を通じて子どもの創造力・表現力を育もうと、弁当を自作する「弁当の日」を設ける。

校長 渡邊由美子先生
児童数 373人
学級数 15学級(うち特別支援学級2)
所在地 〒505-0004
岐阜県美濃加茂市蜂屋町上蜂屋 11
TEL 0574-25-2904
URL <http://www.city.minokamo.gifu.jp/school/hachiya/>



美濃加茂市立蜂屋小学校校長

渡邊由美子

Watanabe Yumiko

「ひたむきな営みを続ける先に、やっと美しい花が咲く」



美濃加茂市立蜂屋小学校

高木健太郎

Takagi Kentaro

6学年担任
「勉強、生活両面で中学校につながる教育を目指す」



美濃加茂市立蜂屋小学校

天野賢次

Amano Kenji

2010年度PTA会長
「何事にも自発的に取り組む子どもを育てたい」



美濃加茂市立蜂屋小学校

坂井 哲

Sakai Satoshi

2009年度PTA会長
「他者を思いやる心を育みたい」



炊き込みご飯や、きんぴらごぼう、とんかつなど、内容の多彩さに、児童の積極性が表れている。児童は、おかずを交換しながら、味つけのこつなどを話し合った

教師も弁当を持参する。「私が作ったのは、1回目はチャーハン、2回目はカレー。子どもへの分けやすさを考えて決めました」(高木先生) 弁当を忘れた児童が6年生で1人いたが、担任の弁当を渡して対応した



「当初は、『弁当の中身によっていじめが起きているのではないか』『忙しい朝に余計なことを増やしたくない』など、反対する保護者もいました。しかし、実施後は『買い物や献立づくり、調理を一緒に出来て楽しかったし、子どもとの会話が増えた』『子どもも楽しそうだった』という

声が多く寄せられました」（天野賢次 PTA会長）
 渡邊校長は、今後の取り組みについて次のように話す。
 「保護者を動かす最大の力は、子どもの頑張りや達成感に満ちた笑顔です。『弁当の日』は、子どもに生きる力や思いやりの心を育むと同時に

に、保護者としてどうかかわるのか、その在り方を考える機会でもあると思っています。本校に在籍する栄養教諭の指導も生かしながら、常に料理する楽しさを感じられるような工夫をし、子どもも保護者も教師も育つ『弁当の日』を目指したいと考えています」

図1 第1回「弁当の日」アンケート調査結果(2010年1月実施)

Q1 どのコースにチャレンジしましたか?

学年	人数	A.完璧	B.おすすめ	C.基礎	D.行わなかった
5年生	56	15	40	1	0
6年生	59	16	31	10	2
合計	115	31	71	11	2
		27%	62%	9%	2%

Q2 作ってみてどうでしたか?

学年	人数	とても良かった	良かった	どちらでもない	良くなかった	とても良くなかった
5年生	56	29	22	5	0	0
6年生	59	19	25	12	0	3
合計	115	48	47	17	0	3
		42%	41%	15%	0%	2%

Q3 もう一度やってみたいですか?

学年	人数	とてもやりたい	やりたい	どちらでもない	やりたくない	とてもやりたくない
5年生	56	19	22	14	1	0
6年生	59	12	15	24	5	3
合計	115	31	37	38	6	3
		27%	32%	33%	6%	2%

「やって良かった」という声

- 「実際に自分でお弁当を作ってみて、お母さんの大変さがよくわかりました」(5年女子)
- 「今回はB(おすすめ)コースだったので、次回はA(完璧)コースをやってみたい」(5年男子)
- 「自分はもう卒業するけど、こういう取り組みはぜひ続けるべきだ。ふだんご飯を作る人の大変さとすごさが分かると思う」(6年男子)
- 「初めて(家族と)いっしょにお弁当を作った。とても楽しかった。またやりたい」(6年女子)

「やりたくない」という声

- 「思ったより大変だった」(5年男子)
- 「とても大変だった」(6年男子)
- 「朝は準備が大変だからやりたくない」(6年男子)



ベネッセは、
「学校&家庭 学び応援プロジェクト」
 を実施しています。

11月から
 受付開始予定!

第2弾のテーマ
「知的好奇心」

- ①保護者向け無料冊子
- ②学校向け宇宙種栽培キット
*②は学校に1セット

ベネッセは2007年度から「家庭学習に関する冊子」などを先生方やご家庭に無料で提供する「学び応援プロジェクト」を実施しております。2009年度は、のべ約8,200校から約125万冊ものお申し込みをいただきました。

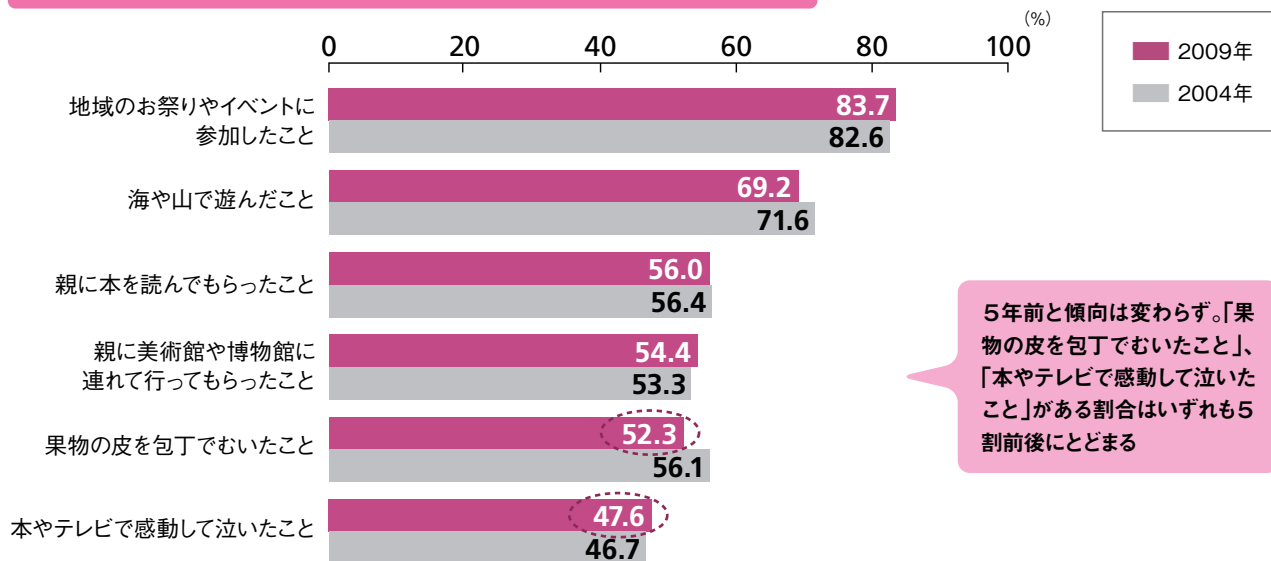
2010年11月には、「知的好奇心」をテーマとして、①保護者向け「無料冊子」②学校向けに「宇宙種栽培キット(学校に1セット)」のお申し込み受け付けを開始する予定です。貴校の教育活動にぜひお役立て下さい。
 *スペースシャトルの帰還時期・状況によっては、「宇宙種栽培キット」のお届けが遅くなる(またはお届け出来ない)場合がございます。ご了承ください。

学校&家庭 学び応援プロジェクト
 ホームページ
<http://www.benesse.co.jp/manabiouen/>



「読み聞かせ」「保護者と美術館等に行く」経験があるのは5割強

小さいころから今までの経験(小学4～6年生)



5年前と傾向は変わらず。「果物の皮を包丁でむいたこと」、「本やテレビで感動して泣いたこと」がある割合はいずれも5割前後にとどまる

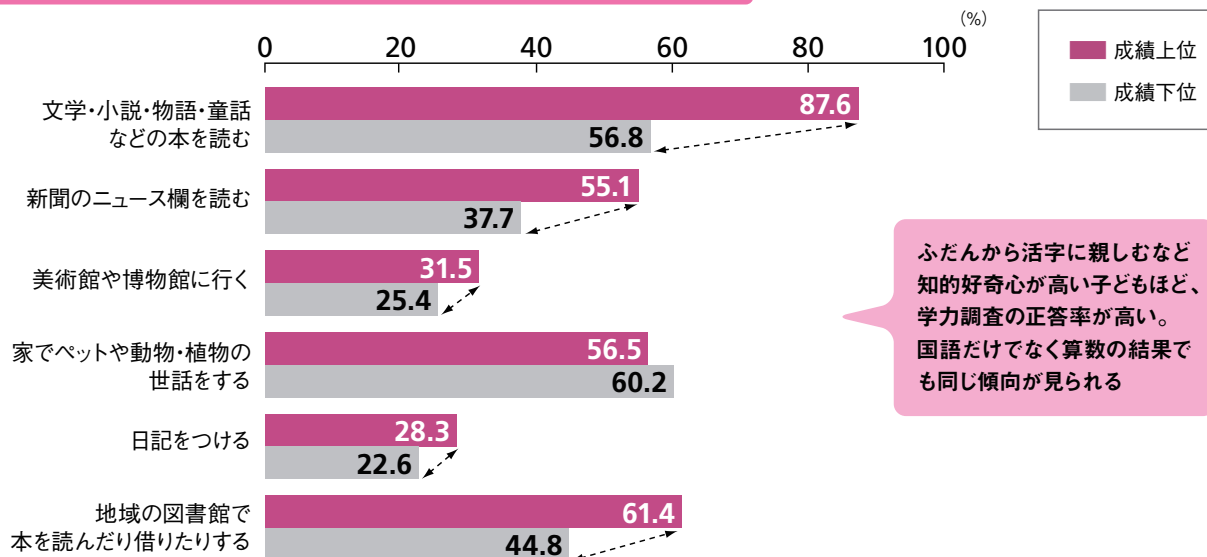
注) 値は「たくさんあった」「ときどきあった」の合計

出典: Benesse教育研究開発センター「第2回子ども生活実態基本調査」

調査時期は2009年8月～10月、調査対象は全国の小学4年生～高校2年生(うち小学生は3,561人)、調査方法は学校通しの質問紙による自記式調査

知的好奇心が高い子どもは学力が高い

日常生活の中での「学習」と成績の関係(小学5年生・国語)



ふだんから活字に親しむなど知的好奇心が高い子どもほど、学力調査の正答率が高い。国語だけでなく算数の結果でも同じ傾向が見られる

注) 数値は「よくする」と「ときどきする」の合計。サンプル数は上位490名、下位437名

出典: 「第4回学習基本調査・学力実態調査」Benesse教育研究開発センター

調査時期は2006年11月、調査対象は、「第4回学習基本調査・国内調査」の対象者のうち、小学5年生2,446人、中学2年生1,723人。調査方法は学校通しによる自記式調査(テスト)



上記の関連データはコチラ!
<http://benesse.jp/berd/>
*「調査・研究データ」コーナーをご覧ください

2010 Vol.1へのご意見

このコーナーでは、編集部へ寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

*『VIEW21』小学版のバックナンバーは「Benesse教育研究開発センター」ウェブサイト(<http://benesse.jp/berd/>)でご覧いただけます。

◎天童市立高橋たかた小学校では、先生方に「みんなの授業」という意識があるからこそ、学校組織として授業研究を推進していけるのだと感じました。

[滋賀県／K小学校／M・A]

◎すべての教育活動、研究と目指す子どもの姿がしっかり運動している天童市立高橋たかた小学校の実践を読み、大切な視点を再認識しました。北杜市立高根ほくと西小学校の英語活動では、同じ方向を見て協力し、小さな努力を重ねているところが素晴らしいと感じました。

[鹿児島県／T小学校／O・K]

◎児童の変容を見取る研修はまとめ方が難しいので、高知市立介良潮見台けらしおみだい小学校の研究会の写真がとても参考になりました。

[栃木県／G小学校／O・H]

◎子どもが落ち着かないのはそれなりに理由があるから。高知市立介良潮見台けらしおみだい小学校の、子どもの内面を知り信頼関係を築けると、静かで穏やかな雰囲気きゆうきの授業が出来るという研究が素晴らしいと思います。親子が話す時間は案外少なく、子どもの思いを受け取る機会はなかなかありません。春日市立日の出ひのひ小学校の「日の出っ子ノート」では、ノートに文字で気持ちを表現し、保護者もコメントを書けるところに良さを感じました。

[愛知県／N小学校／K・Y]

◎本校も小規模校のため、俱知安きちあん町立西小学校榊山分校とニセコ町立近藤小学校の連携が大変参考になりました。外国語活動は、「気張らずに」が本当に大切だと感じます。北杜市立高根ほくと西小学校の考えにとっても共感できました。

[長野県／M小学校／S・K]

◎俱知安町立西小学校榊山分校とニセコ町立近藤小学校の記事は、「連携」に興味があり、じっくり読みました。本校とは違う環境を逆手にとり、上手に運営されていると感じました。

[神奈川県／F小学校／I・H]

◎校長のリーダーシップの大切さや柔軟な対応について日々考えていたので、有田川町立藤並ふじなみ小学校の実践に出会い、勇気がわいてきました。

[鹿児島県／K小学校／U・M]

◎有田川町立藤並ふじなみ小学校と有田川町教育委員会の記事では、日々の授業を大切にすることで授業を改善し、具体策として授業に集中できる環境整備をしたことと、教育委員会の支援を得ながら校長自らがリーダーシップを発揮し、当たり前のことを具体的に実践した過程についてじっくり読みました。

[岡山県／S小学校／A・S]

◎世田谷区立給田きゅうでん小学校・土橋校長先生の記事は、若い先生に読んでほしいと思いました。「子どもが出来ないのは、自分の指導に問題があるのではないか」と考えることは大切です。

[福島県／M小学校／N・K]

◎時代は変わっても教育のプロとしての意識を常に持ち続ける、世田谷区立給田きゅうでん小学校・土橋校長先生の思いが、記事からひしひしと伝わってきました。

[鹿児島県／M小学校／N・M]

◎春日市立日の出ひのひ小学校の「日の出っ子ノート」の取り組みからは、家庭教育の大切さを保護者に感じてもらえるためのヒントを得ました。

[島根県／K小学校／S・M]

編集後記

「本質」「中核」の大切さを、先生方からよくかかっています。「言語活動は何のために行うか」という部分はまさに、「本質」「中核」であると思いますが、物事の中核を忘れないことは、シンプルなようで、実は難しいことだとも感じます。私自身も、『VIEW21』を編集する上で最も大切なことは何か、読者の先生方どのようなメッセージをお伝えすればよいのかを常に考え、本質を見失わないようにしていきたいと思っています。(青木)

VIEW21 小学版 2010 Vol.2

2010年9月6日発行／通巻第25号

発行人 新井健一
編集人 原 茂
発行所 (株)ベネッセコーポレーション
Benesse教育研究開発センター

印刷製本 大日本印刷(株)
編集協力 (有)ペンダコ
執筆協力 柴崎朋実、二宮良太、山口慎治
撮影協力 荒川潤、川上一生
イラスト協力 浅沼リカ、幸 剛

◎お問い合わせ先

VIEW21編集部

電話 03-5371-1238

〒163-1422 東京都新宿区西新宿3-20-2
東京オペラシティタワー 22階

©Benesse Corporation 2010